
鏡花水月～星に乗せる恋の歌～

エデンの守護者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鏡花水月ゝ星に乗せる恋の歌

【Nコード】

N5303Z

【作者名】

エデンの守護者

【あらすじ】

彼女は都会から一日だけ俺の村に来る。
俺はずっと、この村出ることができない。
でも、あの約束ですっとつながっている。
そう、僕らは織姫と彦星。
一年に一度しか会えない、悲しい恋なんだ。

1話『過去の約束、今の願い』？（前書き）

全力小説第二段。

今回は、長編小説ですよ

1話『過去の約束、今の願い』？

7月7日、世間でいう七夕の日。

子供たちは村を回り、お菓子をもらいに行っている。

しかし俺は、七夕を回ったことがない。

別にひねくれていたわけではなく、

母親の友達の娘が毎年その日に来ていたのだ。

俺はずっと、その子と朝から晩まで遊んでいた。

母さんにつれまわしすぎて、怒られもした。

村から離れて、警察沙汰にもなったこともある。

でも、彼女は今でも毎年この村に来ている。

彼女のことはあまり知らない。

知っているのは、名前と年齢、都会から来ているということだけ。

彼女から、自分のことを話すことはないが、

俺が聞くこともない。暗黙のルール。

俺が13歳のとき、彼女とある約束をした。

「私が18歳になったとき、すべてを話す。」と

そして「そのとき言った、私の言うことは必ず聞いて」と

彼女がこの約束を覚えているということは、断言できない。

でも、俺はこの年、彼女が18になる今年をずっと待っていた。

今日、7月7日。

18歳の彼女が、この村にやってくる。

1話『過去の約束、今の願い』？

彼女との約束の日、いつもと違う場所で落ち合うことになっていた。
『夜空の森』にある、『天の川』という橋。そこが待ち合わせ場所。
そして、俺はもう、その場所に来ている。

待ち合わせの時間は、夜の九時。空の天の川がもっともきれいに見える時間。

しかし、彼女は時間をすぎても来ない。
やはり彼女は、約束を忘れていたのだ。

「はあ、俺の恋も散るのか。」

俺たちが交わしたもう一つの約束。

彼女が俺にすべてを話したとき、俺はあの時の告白の返事を返すこと。

「こう考えると、俺には5年前のことしか頭にないんだな。」

家に帰ろうとしたとき、俺の目に、人影が映った。
一瞬だが、確かにいた。

「あなたが、東堂正樹さんですか？」

俺の後ろにたつ人間は、いままでで、一人しかいない。
いつも、彼女と一緒にいた・・・

「変な冗談はやめてくださいよ、昭介さん。」

「んー、やはり分かりますか。」

さすがは、東堂剣術の後継者の方ですね。」

「それは、まだ、先の話になりますよ。」

隙のない雰囲気を漂わせながら、無防備に立っている。

そして何より、懐かしい感じがする。

彼女にあった、最後の年。この人ともそれ以降あってない。

「五年ぶりですね。咲乃は元気ですか？」

「ええ。とっても元気ですが、その分こちらでも大変ですよ。」

・・・あなたが聞きたいのは、こんな世間話じゃないでしょう？」

紹介さんも、俺の聞きたいことは分かっているようだ。

まあ、そうなって当然と思うだろう。

なんせ、彼女は唐突に連絡なしに、こなくなったのだから。

「咲乃は、なぜ5年間、この村に来なかったのですか？」

「長話は得意ではないので、短刀直入に言います。」

この後、言った紹介さんの言葉は俺の生きる道を無理やり曲げていった。

「お嬢様の咲乃さまは、来月の七日、結婚いたします。」

相手は、日本一の財閥・続木財閥の息子です。」

「うそ、だろ。」

俺の近くにいた、咲乃は、俺の知らない世界にいた。

俺と咲乃の思いは、この、銀河にいる、織姫と彦星のように一年に一度の切ない恋より、
もっと切なく儚い、ものなのかもしれない。

2話『父という背中』？

昭介さんは、咲乃の結婚式の招待状を俺の両親に渡すために、俺の家に来ていた。

俺は、結婚の話を聞くのが嫌で昭介さんがいるまで道場で竹刀を振っていることにした。

竹刀を無我夢中で振ることによって、咲乃を少しでも忘れられると思ったからだ。

「そうやって、咲乃嬢ちゃんを忘れているのか？え？バカ息子。」

親父は、道場に入ってきたとたん、俺の心の中をえぐってきた。

「・・・親父、冷やかしたら他でやってくれ。」

今は、ちよっと相手する自身ねえよ。」

「つたく、なんでこんな残念な子になっちゃったのかね？」

「うるさいなー、あんたの教育が悪いからだよ！」

柄にもなく俺は、大声を上げてしまった。

もう、自分が情けなくて、しょうがなかった。

親父も呆れていると思い、顔を見たが、その顔は真剣そのものだった。

「確かに、俺の教育なんて適当だ。」

だがな、俺はお前に3つだけ大事にしろといったものがある。お前は、それすらも忘れてしまった。」

3つのこと？金？女？酒？それぐらいしか父から教わったものなかったはずだ。

「もっかい俺が教育パパになって、一から息子にお勉強教えてやるよ。」

俺では、到底太刀打ちできないとすぐに分かる威圧。

親父の周りの空間は、いや、この道場全体は親父にすべて吞まれた。

「無理だ。わかってんだろ！

俺が親父には勝てないことぐらい！」

「そういつて、あきらめるのか？見ないふりするのか？嬢ちゃんという存在をなかったことにするのかよ！！」

親父がかなりの速さで、竹刀を振って、俺に当てようとしてきた。ギリギリのところで、俺はとめた。

しかし、二発目を俺は見ることもできずにくらった。

「教育パパの、お勉強！

ひとつ！『惚れた女につく虫は殺してでも潰せ！』」

「な、なにいつてやがる、このバカ親父。いきなり竹刀振り回すんじゃないよ。」

弱弱しくも、俺は懸命に声を出す。

こんな、攻撃を食らったのは、小学生以来だ。

「残りの二つは、お前が思いだせ。」

そしたら、俺はもう何も言わん。」

親父はきれいにまとめて帰ろうとする。

俺は、止めようとするが声が出ない。

そう思っている間に、父は道場を去った。

ひとつ！『惚れた女につく虫は殺してでも潰せ！』

わが家の家訓らしき3つの言葉の一つ。

それが俺には、どうも心の痛みを強めていて、不快だらけだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5303z/>

鏡花水月～星に乘せる恋の歌～

2011年12月27日22時45分発行